

【聞き取り調査側の感想】

■この聞き取り調査は4人で行なった。それぞれの間人関係をたどりながら、広島市、廿日市市、三原市、三次市など地域的には広範囲であった。

その中で地域差は認められなかったし、さほど年齢差もなかった。「性教育を受けていない」ということが、学校現場において教育としてなされる場合、同じ出発点だということのようだ。しかし、そうは言っても微妙なところの違いはあり、ある一人の調査者は50代以上の教師に5人ほど断られたと報告している。

以下は、調査者の感想である。

■大規模な学校では、教職員の意志統一が難しく、個人的な頑張りで作る以外なかったようだ。むしろ小規模校の方が、だれか一人積極的な人がいれば学校全体に普及しやすいという事実がある。

■女性の方が真剣に取り組んでいるようだ。特に30～40代。性差別の視点を押さえているのも女性。男性はそこが弱い。例えば、「マスコミの悪」はほとんどの男性があげているが、具体的にどこが問題なのかと突っ込むと、言葉にできない人が多い。男性は頭では理解しているが、体がついていないということだろう。自分の問題としてとらえていないと言えようか。

■男性の中には、「科学性」で十分とする人が多く、人権問題、関係性の問題としてとらえる人が少なかった。科学的といいながら、自分の体はよく知らないままであり、指導者という立場で語りがち。

■「校長を通さないと応じられない」という人も結構いた。しかし、忙しい時期にもかかわらずほとんどが快く応じてくださり、性教育への不安と期待を率直に語る人も多かった。

■「生命の誕生」に神秘性を持たせようとするのは男性に多い。しかし出産体験を共有した男性は、「性教育」を楽しんでいる様子がうかがえるし、授業そのものも盛り上がりを見せている。

■性の持つ多様性、例えば「虚しさ」とか「なぜタブー視されてきたのか」とか言った部分がなかなか引き出せないところがあった。あまりに「健康的に」「生殖としての性」と考えがちで、避妊や中絶、快楽としての性、などに踏み込みにくくなっているようだ。

■性教育といった場合、ほとんどが女の子をイメージする人が多く、しかも「弱い性だからまもらなければ」という被害者としての女の子を念頭に置いている。「加害者」になりやすい「男の子」をイメージした人はほとんどいなかった。そろそろその発想はやめて「男の子への性教育」を軸に展開されていいのではないかと思う。そうしないと、教える側の男性教師の意識も変わらないのではないか。

■余談だが、今回学校を訪れてみて少し驚いたのは、全女性がといていいと思うがみんなスカート姿であったことだ。子供達を相手に活動的に動くにはズボンが合うのではないかと思うが。

■教師は「指導する」という言葉が身についているようで、気に掛かる。特に性教育においては「指導する」より「共に考える」といった姿勢が必要ではないかと思う。自分自身の「解放されていない性意識」と「指導」という言葉がどうもちぐはぐで危うさを感じた。

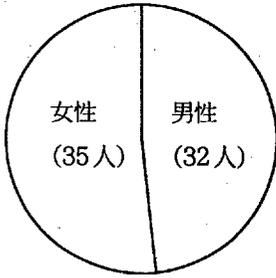
■「生命の尊重」が「母性の尊重」にすり変わっていく危険性も感じる。教科書に流れている基調でもあり、もっと「女性の人権」ということが語られていいのではないか。

主な集計報告

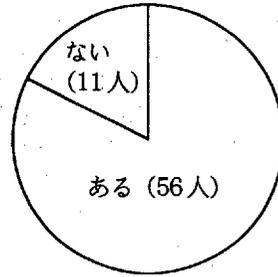
まず、「聞き取り調査67名」という数字は、統計的な意味はほとんどなしていないと思う。それより、一人一人が「性教育」について何を表現しているか、どんな言葉の使い方をしているかを中心に読み取っていったことをお断りしておきたい。したがって「性別」や「年齢」、「結婚しているかしていないか」「担任学年」「教育歴」などの比較による差異は、レポートのなかでも触れているが、あまりでていない。

しかし、今回の調査の主旨は「性教育に携わる教師の意識」であり、教師たちの戸惑い、不安、期待、自信などを知ることにより、今後の「性教育の方向性」を考えるうえで、貴重な参考資料になると確信している。

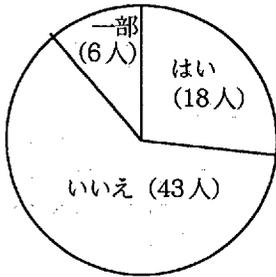
(1) 男女の内訳 67人



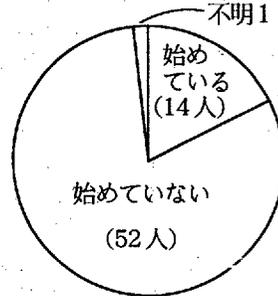
(2) 性に関する授業をしたことがあるか。



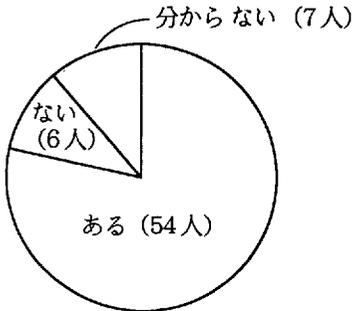
(3) 改訂版保健・理科の教科書に目を通したか。



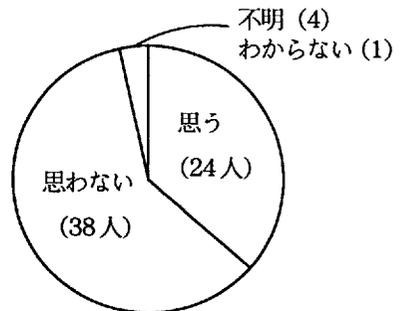
(4) 来年度の準備をしているか。



(5) 小学生に性交を教える必要があると思うか。



(6) いよいよ性教育が始まったと思うか。



面接（男性・女性）67名

(1) 性に関する授業をしたことがあるか。

ある (56) ない (11)

「ある」と答えた人が84%。かなりの人がこれまでになんらかの形で授業をしている。男女の比較で言えば、違いが2つみられる。1つは、性教育を人権や性差別の視点で見たいこうとする姿勢が女性に若干多いこと。もう一つは、女性の「結婚、妊娠、出産」体験が、性教育の必要性を実感させていることである。妊娠すればその経過が子供達の目の前で展開されるわけだから、「視覚的教材」になりやすいということだろうか。

「ない」と答えた人は共通して、「養護教諭に任せていた」というもの。これまで性教育を担っていたのが養護教諭であったことを表している。

(2) 改訂版保健、理科の教科書に目を通したか。

はい (18) いいえ (43) 一部 (6)

この問いはこれまで性教育を積極的にやってきたか、きていないかによって違っている。積極派は、「内容が不十分、むしろ後退している」というし、消極派は「ここまでやるのか」ということになる。女性に「生物学的すぎて、心情部分がない」と指摘する人がやや多い。

(3) 準備をしているか。

始めている (14) 始めていない (52) 不明 (1)

男性で性教育の研究会を継続している人は、「教科書の内容検討」に入っている人がいる。しかし、今までは女性の養護教諭の人が多く、このように男性の教師が積極的にやっているのはめずらしく、貴重だ。今後は、担任に向けた日ごろからの研修の場が必要のようだ。(2)に関連して、これまでの自主授業の内容に自信を持っている人は女性に多く、頼もしい。

「始めていない人」が78%。「忙しい」が一番の理由だが、年度末の時期であったことと、「性教育は後回しになりやすい」ということか。

(4) 小学生に性交を教える必要があると思うか。

ある (54) ない (6) 分からない (7)

「ある」と答えた人が80%。その理由はいろいろだが、やるべきこととして認識していることがわかる。男性のなかで「子供達を守るため」に必要という人がいたが、女性はもう少し具体的で「レイプやロリコン社会から守る」ためと知っている。女性としての立場からの視点がでている。ただ、いつまでも女の子に「自分を守る」ためと教えるのはどうだろうか。そろそろ「男の子への性教育における性交」という視点がクローズアップされてもいいような気がする。

「ない」と答えた人のなかで、一人だけ「快楽に走るのが不安」という人がいた。こうした意見はごくごく少数派になってきたようだ。また、親の意識を気にしている人もいたが、男女とも若い教師であり、経験が少ないところからくる不安感とも受け取れる。

(5) あなたが考える性教育のメインテーマは何か。

性教育を「性差と役割」の認識に置く人が男性のなかに少数だがいることが分かる。女性のなかにも「妊娠するからだ=弱さ」とする人が一人だけいて、性教育をする側の性意識も今後はこれまで以上に問われていかなければならないだろう。

ただ、男性のなかにも「性差別」の視点をあげる人がいて、男性の性意識を問題にする人がでてきているといえる。

「情報の判断力」という視点は面白い。ポルノコミック規制条令を施行する県が増えてきて、子供達の目からとにかく遠ざけようという動きがあるが、子ども自身にその判断力を付けていくという視点は、今後の性教育の方向性を考えるうえで大切なことではないか。

(6) いよいよ性教育が始まったと思うか。

思う (24) 思わない (38) 分からない (1) 不明 (1)

男女とも「思わない」と答えた人が多いことから、以前から取り組んできた人が多いことが分かる。ただ、教科書に取り入れられたことがきっかけとなり、これまで消極的であった教師たちの刺激になるし、学校全体で系統的に取り組まざるをえなくなると考えている人が大部分である。

(7) 小学生の性意識と性行動の問題点。

「氾濫する興味本位の性情報」からくる問題点と、「学校や家庭での子育て観、男女観」からくる問題点に分けられる。

子供達の問題を目の前にして、性教育の必要性を強く感じた人の性教育への姿勢は、「性差別」に注目したものが多そうだ。ただ漠然と「時代要請」だからと考えている人は、あまり問題も感じていないし、性教育の方向性が見いだせないままである。「子どものありようを見つめること」から何かが生まれる可能性がある。

(8) 性教育を進めていくうえで障害になるものは何か。

☞あなたの場合

「性教育を受けていない時代」に生きた世代の戸惑いがよく伝わってくる。教える側の性意識を問題にすることの大切さを感じさせる。「男性は女の子への、女性は男の子への性教育が難しい」とのべているが、体験主義に陥ると、イメージ力が弱くなる。さまざまな実践をもとに、綿密な言語化作業が急務のようだ。異性へのイメージを豊かにするのも性教育の重要な課題であると思うが。初潮教育どまりであれば、「女の子は男の先生からの指導を嫌がる」こともうなづける。

☞学校の場合

これまでは個々の教師の意識によってささえられてきた性教育も、今後は学校全体の取り組み姿勢にかなりの比重がかかるだろう。「九九一つでも、漢字一つでも」と考える学校があれば、予算や時間確保の問題がでてくるのも当然。男性から「40以上の男性の不理解」があげられているが、男性自身が「男性問題」としてとらえ、教師間で議論できる雰囲気を作っていくことも大事だ。

☞社会的には

女性は「性別役割分業とその意識」をあげる人が、男性は「性情報の氾濫」をあげる人が多い。男性が見逃しているのは「興味本位の性情報」の作り手が主に男性であるということだ。そのことに気づいたとき、性教育の内容もずっと深まるのではないか。

(9) 性教育を進めていくうえで今一番欲しい教材は何か。

さまざまな視覚的教材を望む人がほとんど。「胎児の心音」「産婦人科の出産シーン」「性交を説明できる人形」など、具体的、かつ言葉で表現できないものを視覚で補うものがどうしても必要のようだ。

子供達が自由に、いつでも読める絵本などを置いている学校はほとんどなく、教師や養護教諭用になっているようだ。恒常的な環境を作ることも大事だろう。

(10) 養護教諭にはどんな協力をしてほしいか。

養護教諭への依存度が男性は高い。月経手当てなどを指導するのが難しいというのもあるようだが、これまで積極的に取り組んでいる人が少ないために、性教育の資料、教材、プログラムなど、全面的に頼っている人もいる。

女の先生のなかに、養護教諭は授業をする資格は持っていないのだから、あくまで健康管理だけでいいという意見もあった。

(11) 管理職にはどんな協力をしてほしいか。

管理職が「性教育をどのように理解しているか」ということをベースに、それさえあれば後は任せてほしいという人と、まとめ役という人という人いる。

しかし、結構これまでも理解を示し、協力的だからなにもないという教師もいることから、ここ十年の間に学校に変化が現れているのだろう。実際「最近はやりやすくなった」と述べた人もいた。

(12) 教育委員会にはどんな協力をしてほしいか。

「お金は出して、口は出すな」というのが、教師たちの本音のところ。「性教育プロジェクト」や「参考資料室」など積極的な動きを提案する人もいる。一方少数だが、「何でもかんでも上に要求することは危険だ。自分たちで作り上げるべきだ」という意見の人もいた。

(13) 医療関係者にはどんな協力をしてほしいか。

これまでほとんど医療関係者との連携は頭になかったようだが、今に至ってエイズや妊娠する子供達を前にして、専門家の立場で、子供達の現況を掴んだ情報やアドバイスを求めている。保健所から、赤ちゃんの人形を借りたりする人もいたようだが、今後は学校に常時保管されていく可能性があるので、別の関わり方が考えられていけよう。「医者講演料が高い」と不満を持つ人もいて、性教育普及のためには、「ボランティア精神」が必要と厳しい。

(14) 保護者にはどんな対応をしてほしいか。

大きく分けて、親自身がもっと勉強してほしいというものと、子どもへの対応として「誤魔化さないできちんと話してほしい」というもの。どうも親の方に「寝た子を起こすな」意識がつよいと教師たちは感じていて、学校と家庭にギャップから生まれることを恐れているし、保護者の批判を恐れている様子がうかがえる。「学校と歩調をあわせて」と協調する教師も少なくなかった。

「教師の立場だとやれるけど、自分を一保護者として考えたらようやらんわ」と本音をいう人も。これからはこれまでの「男女役割分業」を生きていけない夫婦が多くなることから、それ自身が性教育の一貫として期待もできる。

(15) 自由記入

女性の方が、社会の流れに敏感で、それを学校現場に反映したいと意欲的なことが分かる。これまでの積み重ねの成果を感じている人が多いのだろう。

面接・女性 (35名)

(1) 性に関する授業をしたことがあるか。

ある (29) ない (6)

「男の子と女の子のからだの違い」をテーマに選んでいる人が多い。「障害者は生まれてこないほうが幸せなのか」「性差別」など、人権問題に触れている人もいる。自らの妊娠を機に、子供達に「胎児の成長」を教えるといった妊娠便乗型もいた。また、地球の誕生から自分の誕生まで、壮大な流れのなかでとらえようとしている人もいる。

単発が多いが、年1回を1～6年まで系統的にやっているから、恒常的というのか、という質問があったので、そこらが不鮮明であった。こんなケースが少なからずあると思える。

「ない」という人は、やはり養護教諭に任せてた、低学年なので学習内容になかったから、という理由。ただ、担任が妊娠すると、その経過に子供達が関心を示し、性教育のとっかかりにはなるようだ。

(2) 改訂版保健、理科の教科書に目を通したか。

はい (8) いいえ (25) 保健だけ (2)

「生物学的な記述が多く、心情の部分が抜けているのでそこをどうするか難しいと思った」「この教科書を使うと今までより後退すると思った」と懸念する人と、「体の仕組みや生命の誕生があるのは良い」と評価する人という。「教科書に乗せたままで、後は現場でどうぞといわれても困る」と嘆く人もいる。

(3) 準備をしているか。

始めている (7) 始めていない (27) 不明 (1)

やはり「始めていない」が多い。「始めている人」は、新聞・雑誌の記事収集を個人的にしているが、子供達に「ひとりでふたりでみんなと」という副読本をもちだして配布した熱心な教師がいた。今まで初潮教育(女だけ)しかしていなかった学校(私立)があったが、これを機に学校で「性教育推進委員会」を設け準備をしているようだ。

「始めていない人」の理由は、「忙しい」が一番多い。しかしこれまで積極的にやってきた人は、今更という感じで、自信をもって望んでいる。取り立てて準備する必要はない、という人もかなりいることが分かる。

(4) 小学生に性交を教える必要があるか。

ある (29) ない (3) わからない (3)

「ない」という少数派は、各20・30・40代で一人ずつ。「親の考え方を無視できない」という親の意向お伺い派と、「性行為にこだわると快樂に走る」という快樂否定派がいる。「分からない」という人は、「時期早尚」「興味本位に陥りそう」など、全く否定しているわけではないが、ジレンマを感じている。

「ある」の多数派の意見で目を引くのは、「女の子は5、6年になると危険だ」「レイプ、ロリコン社会のなかで自分の性器を守るため」など、「被害者としての女性」がいかに自分を守るかという発想で、「加害者としての男性性教育」の意識が見られない。また、女性教師は、自分の結婚・出産を機に、性教育の必要性を感じた人も多い。一方で、「性交」を教えた人は、子供達が大人が考える以上に素直にきちんと受け止めたことをあげている。今後こうした経験がおおいに性教育を進めていく原動力になると思われる。

(5) あなたが考える性教育のメインテーマは何か。

「男女のからだの成長と変化」「生命の尊重」をあげる人が多いのは男性と変わらない。しかし「家族」「労働」「自分の生き方」「男女の共生」「障害者との共生」など、性教育を人間のあり方全体のなかでとらえようとする意識がみえる。「男女の違い」をあげた人(40代)の理由に、「女は妊娠するからだ＝弱さ」を自覚する必要があるとしているが、性教育でこれが協調されるのはどうだろうか。

(6) いよいよ性教育が始まったと思うか。

思う (13)

思わない (20)

分からない (1)

不明 (1)

「思う」と答えた人の意見をひろくと「教科書に位置付けられた」ことをきっかけに、系統的にできること、あるいはこれまで消極的だった教師への刺激になったことをあげている。教師にとって最低限の指針としてとらえているようだ。

「思わない」としている人の理由は、「以前から教科書以上に取り組んでいる」という自負のもとに語られていたり、「無理にすることはない」とする白けた感覚の持ち主もいる。「5年生では遅い」とする人は、両者に見られる。

(7) 小学生の性意識と性行動の問題点。

「男らしく、女らしくという意識がそれぞれ身についている」「女は馬鹿じゃけえ家事をするんじやと男の子がいう」など、社会の女性差別をこの頃から内面化していることが分かる。「男の子がズボンずらしや金たまつぶし、スカートめくりをしても、女の子が怒らない」「男がなんで痴漢になるのか」を目の前にして、性教育に目覚めた教師は、たぶん女の子の主体性を育てたいという気持ちがある人だと思える。「男の子に性器いじりが多い」のはなぜだろうか。

一方で、「中学受験校(私立)なので、親も子もあまり関心がない」というのも現代的な問題点と言えるようか。

「性教育をする中で、男女に思いやりが育ったり、ふざける子に注意する子がでてきた」としている人もいる。

(8) 性教育を進めていくうえで障害になるものは何か。

□あなたの場合

「中絶や避妊、性交など教えない」が、「日常的な言葉になっていないし、その表現をどうしていいかわからない」とのべる人が多い。これは、いかに自分のからだ、生き方を言語化していないかということと結びついている。多くの人がこのことで自信が持てず躊躇していることがうかがえる。また、出産経験、結婚経験がない人は、更に戸惑いが大きいようだ。男性より少ないが、「異性、つまり男の子に性教育をすることの難しさ」を訴える人もいる。これらをひっくめて「自分自身が解放されていない」ということになるだろうか。

□学校の場合

「緊急課題になりにくい」など、「そんな時間があったら算数を教えるべき」というムードが少なからずあること、「親の啓発」がなされていないので批判を恐れていることなどがあげられているが、教師自身が研修する時間がないこと、保証されないことも大きいようだ。

□社会的には

女性差別社会が性教育の浸透を妨げていると認識している人が多い。「男尊女卑、性の商品化、男らしさ・女らしさ」「男は能動、女は受け身」「女性の人権を無視した情報」「大人の男女のあり方」など、今社会的に見直されている問題を掴んでいるといえる。これは、男性が「性情報の氾濫」などと抽象的なものに対して、女性の立場からの訴えのようだ。

「性交を教えるべきでない」という人の意見だが、テレビコマーシャルで「ナブキン」の宣伝があるのも困るというのがあった。

(9) 性教育を進めていくうえで今一番欲しい教材は何か。

性教育をすすめる上での障害のなかに、表現力の問題がでていたが、その反映としてか、視覚的なものを求めていることがわかる。しかも「ソフトで美しいもの」というわけだ。変わったところでは「胎児の心音」というのがあった。

「子どもの数だけ、あるいは自由に閲覧できる絵本」が欲しいとあるが、このことからいかにこれまで性教育用の本が身近に置かれていなかったかということを読み取ることができる。

「学年に応じたビデオ」「系統的なカリキュラム」などが、全体的に望まれているものようだ。「しかし文部省作成はお断り」という厳しい人もいた。

(10) 養護教諭にはどんな協力をしてほしいか。

「リーダーシップを取ってほしい」という人と、「あくまで担任がするもの。フォローだけでいい」という人に別れる。だが「生理の手当て」と「個々への対応」は従前どおりやってほしいと思っている。男性より依存度は低い。

(11) 管理職にはどんな協力をしてほしいか。

「性教育の必要性を理解してほしい」という基本的なところを望んでいる人が多い。これまでの管理職の姿がみえる。そして「男女差別のない学校」をあげている人は少ないが、学校自体が男女差別を温存しているところでもあることはうかがえる。また「保護者の意識」を意識していて、「PTAの啓発」の役割が管理職にあると知っている。そのうえで「予算、時間の確保」が可能だろう。

(12) 教育委員会にはどんな協力をしてほしいか。

「性教育プロジェクトを作れ」「女性差別撤廃条約の学習」など具体的な提案がされている反面、「何も期待しない」という人もいる。「予算の確保」が教育委員会に期待するものの多くであることは確か。

(13) 医療関係者にはどんな協力をしてほしいか。

専門家の立場での講演会を望む人は多い。ただし、「気軽に」「ボランティア精神で」と注文がある。性教育はすぐ産婦人科を思い浮かべるが、「子どもに関わる精神科医、小児科医」の参加を望む声がある。「性教育相談窓口の設置」の提案からも、今後はかなり専門的な知識も必要となり、連携を持ちたいと思っている態度と思える。

(14) 保護者にはどんな対応をしてほしいか。

「学校任せにしないで」という教師の叫びが聞こえらるとともに、親自身の性教育が必要だといっているようでもある。そして「学校と歩調をあわせて」家庭でも性教育をすべきとも。しかし「母子、父子、再婚など色々な家庭があるのでその難しさがあるが、親も乗り越えてほしい」と励ます声も。「子どもの変化に敏感であってほしい」という言葉はよく伝わってくる。

(15) 自由記入

「性差別の視点で性教育をとらえたい」「エイズ教育も必要」「障害児への性教育」「性と対極にある死の準備教育も必要」など、社会の動きに敏感な社会派教師の存在がめだつ。そして「買春」から「男子への性教育の必要性」を痛感する教師もいる。このことをはっきりうたったのはこの人一人である。

性教育の一貫として「男女混合名簿」に取り組む人もいて、授業としての性教育以外でやらなければいけないことはたくさんあると指摘する人もいる。

しかし「性交強調報道」や「五日制実施」や「外国の進んだ性教育」など、激しい変化についていけないと不安を持つ教師の姿もあった。

面接・男性 (32名)

(1) 性に関する授業をしたことがあるか。

ある (27) ない (5)

「めしべ・おしべ」のレベルから「性交を押さえた妊娠・出産の仕組み」まで、その内容は教師の性教育に対する認識によって違っている。北沢杏子さんのテキストやビデオ「子どもたちへ」を使いながらの指導をしている人もいる。

子供達の感想に必ずあるのが「赤ちゃんはどうしてできるの?」。子ども流の表現で言えば「卵子と精子はどうやって合体するの?」である。それに対して、きちんと「性交」を教えている人もいるが、疑問を残したまま終わっている人が多いようだ。それに答えなければいけないのではないか、という思いは、「性交を教える必要がある」と思う教師が多いことと結びついているようだ。

子どもからの質問が具体的にでてきている。「射精は痛いんか」「勃起するのはなぜか」「障害者はなぜ生まれるのか」など、かなり教師がつっこんだ話をしていないとでてこないものだ。積極的に取り組んでいる教師の姿が見れる。

「授業をしたことがない人」の理由としては、養護教諭の仕事だと思っている人が多かったが、一人の人は養護教諭の授業にずっと同席し、刺激を受けて前向きになりつつあるといている。これまでやったことのない人には「モデル授業」などをやると良いようだ。

(2) 改訂版保健、理科の教科書に目を通したか。

はい (10) いいえ (18) 一部 (4)

となっている。まだ目を通していない人が多いが、これは年度末の忙しい時期と重なっていたからであろう。

「はい」と答えた人の感想は、内容が性教育として不十分と思った人が多く、これまで実践してきた人は、最初から教科書に期待していない感じだった。逆にこれまで積極的に取り組んでいなかった人は「ここまでできたのか」という驚きを隠さず、興味本位に子どもが受け取らないか不安を持った人もいる。

(3) 準備をしているか。

始めている (7) 始めていない (25)

(2) と関連して「準備を始めていない人」が多い。

「始めている」と答えた人は、突然始めたのではなく、これまで積極的に取り組んできたことの延長として、今回の内容を再検討しているようだ。新聞雑誌の切りぬき、教材集めなどだが、既に教科書内容そのものの検討に入っている人もいる。

「始めていない」と答えた人の理由は、一番が「忙しい」。性教育の方向性が掴めないから、何をしていたか分からないし、自分で勉強してから考えるという人もいる。

(4) 小学生に「性交」を教える必要があるか。

ある (25) ない (3) 分からない (4)

となっており、「教える必要がある」と考える人が圧倒的に多い。

「ある」と答えた人の理由で多いのは「早いうちから正しい認識」を持たせたほうが良いというもの。それについて、「必ず疑問を持つ、避けて通れない」ことにはきちんと答えたいというもの。歪んだ性情報を遮断できない時代にあって、それから子供達を守らなければいけないという教師の責任の持ち方をしているようだ。

「生殖のための性交」を教えるだけではダメだ、と一歩踏み込んだ意見を出した人がいる。

「ない」と答えた人は3人だが、そのうち20代が二人。親の考え方や社会的なタブー観を気にしている。

「分からない」と答えた人は、全く否定しているわけではなく、子どもの個人差や自分自身の力量に不安を抱いているようだ。

(5) あなたが考える性教育のメインテーマは何か。

一番多いのが、子供達の「からだと心の成長と変化」であり、二番目が「生命の誕生」である。「自分自身の誕生と成長の過程を知る」ことに力点が置かれている。時代を感じさせるのが「性交」「避妊」「エイズ」「性差別」「情報の判断力」。極めて性教育が現代的な課題として受け止められていることを示している。

「男らしさ・女らしさ」「母親の役割」をあげた人があり、男女の役割意識を助長しかねないのが、また「性教育」の危険性でもあるようだ。

(6) いよいよ性教育が始まったと思うか。

思う (11)

思わない (18)

不明 (3)

「思う」と答えた人のなかにふたつある。「やっと始まった」と高く評価している人と、「これまでやってこなかった教師も取り組みきっかけになる」という人と。教科書に導入されることの意味は、教師にとって大きいようだ。「報道ぶりから」と、他人ごとのように答える人も。

「思わない」と答えた人の多くは、「以前から取り組んでいる」という。文部省の現場の後追い現象が分かる。さらに、突っ込んで、「これでは性差別的に利用される可能性もあり、自主教材を作る必要性を感じる」という人もある。

(7) 小学生の性意識や性行動の問題点。

漫画や雑誌から知った性的ことば、例えば「エッチ、セックス、チンケン、コンドーム、セックスしよう」などを、主に男の子から女の子をからかうのに使っていることがあげられている。しかも教師のいないところで言っている。また、「男女の仲がぎくしゃくしている」反面、「仲の良い男女がいるとからかう」傾向がある。ポイントタッチやスカートめくり、パンツの下げあいなど、相変わらずの行動も見られる。

女の子は体の変化をマイナスにとらえる傾向があり、特に体育の時間、男女一緒だと着替えないとか、二年生で胸を隠す子がいる。体格や体力の変化のなかで体育嫌いの女の子もでてくると報告する人もいた。

小学校の段階で既に「男らしさ、女らしさ」を身につけている子がいて、社会を反映している。

一般に子どもたちは性を「恥ずかしいもの」「隠すもの」「エッチなもの」ととらえており、これらはマスコミの歪んだ性情報のせいだとする教師が多かった。

その反面、「問題を感じない」と答える人も多く、「性教育の成果」であると自負する答えもあった。

(8) 性教育を進めていくうえで障害になるものは何か。

☞あなたの場合

大きく分けて、自分の「性意識」と「異性である女子への対応」のようだ。自分自身が性差別的であったり、性を語ることに「恥ずかしさ、照れ」を感じる意識が自分の中にあると告白する。女性のことが実感できないことからくる不安があり、また実際女の子が男の先生から教えられることを恥ずかしがるのでやりにくいという。

また、自分自身の「性教育」の方向が分からないので何をどこまで教えたらいいいのか戸惑っている姿もある。

結婚したら「恥ずかしさ」がなくなったという人もあり、性教育と体験が結びついていることを示している。

これらは、自分たちを「性教育を受けていない世代であり、勉強不足である」ためと思っている。

☞学校の場合

まずあげられるのが、教職員の意志統一である。特に40以上の男性に性教育の意義を理解しない人が多いと指摘する人もいる。あるいは小規模ならいいが、大規模校なので難しいと考える人もいて、親の不理解と共に大きな障害とされている。また、性教育より算数と考える学校もある。

それから「1~6年までの系統的カリキュラム」がないことがあげられている。5年生だけでは、あるいは5年生からでは意味がない、性教育をやるなら、早くから系統的にと考えている人が多いことがわかる。

社会的には

やはり、マスコミの影響をあげる人が多い。性産業の存在を含めた「性の商品化」もあげているが、それが男の性意識の問題としてとらえられていないように見える。また、家庭での性教育の遅れを指摘する声も多い。

「寝た子を起こすな」という保護者の声を恐れてもいる。

今回の性教育報道に関して、「性交」ばかりクローズアップされすぎている、男女共生社会に向けての位置付けがないことを嘆く人も二人いた。

(9) 性教育を進めていくうえで一番欲しい教材は何か。

視覚的な教材、しかも1～6年の発達段階に応じた視聴覚教材を求めているのが分かる。また、立体的なもの、例えば、人体模型、等身大の赤ちゃん、パズルで分かる男女のからだの模型など具体的な要望になっている。また、性教育のテーマに「性交」があがっているように、「性交」を教えるための図や人形などがあがっている。面白いのは「ドラマじたてのビデオ教材」とか「アニメーション」で、子供達の関心をいかにして向けるか模索している様子が見える。

(10) 養護教諭にはどんな協力をしてほしいか。

男性なので、女性の立場で、自分たちをフォローしてほしいと思っている。生理の手当てとか体の管理とか、男の教師では女の子も嫌がる傾向があるので相談役として期待している。また、これまで担ってきた、あるいは専門家の立場で、最新の資料・情報の提供を求めている。とともに、指導内容もいっしょに考えるような、性教育の影の推進役を期待している。

(11) 管理職にはどんな協力をしてほしいか。

「信頼して任せてほしい」という人と「まとめ役」をしてほしい人と別れるが、後者の方が多い。具体的には、「予算の確保」「教師の研修」「研修時間の確保」などをあげている。更に保護者の啓蒙、性教育への理解を求めている。「協力してほしい」とははっきりいう人がいるが、組み合い活動をする人であった。

(12) 教育委員会にはどんな協力をしてほしいか。

地域社会の啓蒙を期待する声が多い。「いつでも利用できる資料室」という提案がある。その前に「性教育の必要性を理解する」という前提のうえでだが。

とにかく予算の確保、資料・情報の提供、教材・教具の整備など、たくさん課題があるようだ。また、「性教育に関する研究会に出席した場合、出張扱いにしてほしい」と、性教育への全面的なバックアップを期待している。

これから取り組む人たちは「実践校の資料集」が欲しいようだ。

(13) 医療関係者にはどんな協力をしてほしいか。

「特になし」とする人が多かった。しいて言えば「専門家、現場に携わる立場からの教育研修」にまとめられるだろうか。特にエイズの問題に関しては情報を求めているようだ。

(14) 保護者にはどんな対応をしてほしいか。

「子どもが質問したらきちんと答えてほしい」が一番多い。そして「学校と家庭が食い違わないようにしてほしい」と願っている。また「オープンに」「性交までも教えられる度量を」と「男らしさ・女らしさを植え付けしないで」など保護者自身の性教育への関心と性意識を問うことにもなっている。

「家庭での子供達の様子を知らせてほしい」という人がいて、いまいち連携が取れていないようだ。

(15) 自由記入

そう多くはないが、性教育を性差別の視点で考え始めている男性教師もいて、注目に値する。そして、「性教育をしたほうが自分が楽になる」という意見は、これから取り組んでいく教師たちの励ましになる。「ぼくは性教育が好きだ」と言い切る人もいて、面白い。反面「照れや恥ずかしさ」をなんとか乗り越えたいと努力している姿もあるが、「学校の性教育とマスコミのギャップ」にどう対応したらいいか、性教育には概ね前向きながら、試行錯誤の時期だということをおうかがわせた。

□ 年代による意識の違いはあまりでない。しいてあげれば、独身の人に「照れや恥ずかしさ」が強いということだ。

(4) 小学生に「性交」を教える必要があると思いますか。

ある その理由は

ない その理由は

(5) 小学校でのあなたが考える性教育のメインテーマを必要順に5つあげてください。

①

②

③

④

⑤

(6) この4月からの保健・理科(小学5年生)でいよいよ「性教育」が始まったと思いますか。

思う その理由は

思わない その理由は

(7) 小学生の性意識と性行動で、現在、問題を感じることはどんなことですか。

- (8) 性教育を進めていくうえで、障害となるものはなんだと思いますか。
あなたの場合

学校の場合

社会的には

- (9) 性教育を進めるうえで、今いちばん欲しい教材は何ですか。

- (10) 養護教諭にどんな協力をして欲しいですか。

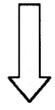
- (11) 管理職の人にはどんな協力をして欲しいですか。

(12) 教育委員会にはどんな協力をして欲しいですか。

(13) 医師・保健所など、医療関係者にはどんな協力をして欲しいですか。

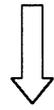
(14) 保護者にはどんな対応をして欲しいですか。

(15) その他、性教育に関して日ごろ感じていらっしゃることを自由にお書きください。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



【聞き取り調査側の感想】

この聞き取り調査は4人で行なった。それぞれの人間関係をたどりながら、広島市、廿日市市、三原市、三次市など地域的には広範囲であった。

その中で地域差は認められなかったし、さほど年齢差もなかった。「性教育を受けていない」ということが、学校現場において教育としてなされる場合、同じ出発点だということのようだ。しかし、そうは言っても微妙なところの違いはあり、ある一人の調査者は50代以上の教師に5人ほど断られたと報告している。

以下は、調査者の感想である。

大規模な学校では、教職員の意志統一が難しく、個人的な頑張りで作る以外なかったようだ。むしろ小規模校の方が、だれか一人積極的な人がいれば学校全体に普及しやすいという事実がある。

女性の方が真剣に取り組んでいるようだ。特に30～40代。性差別の視点を押さえているのも女性。男性はそこが弱い。例えば、「マスコミの悪」はほとんどの男性があげているが、具体的にどこが問題なのかと突っ込むと、言葉にできない人が多い。男性は頭では理解しているが、体がついていっていないということだろう。自分の問題としてとらえていないと言えようか。

男性の中には、「科学性」で十分とする人が多く、人権問題、関係性の問題としてとらえる人が少なかった。科学的といいながら、自分の体はよく知らないままであり、指導者という立場で語りがち。

「校長を通さないと応じられない」という人も結構いた。しかし、忙しい時期にもかかわらずほとんどが快く応じてくださり、性教育への不安と期待を率直に語る人も多かった。

「生命の誕生」に神秘性を持たせようとするのは男性に多い。しかし出産体験を共有した男性は、「性教育」を楽しんでいる様子が見えたり、授業そのものも盛り上がりを見せている。

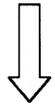
性の持つ多様性、例えば「虚しさ」とか「なぜタブー視されてきたのか」とか言った部分がなかなか引き出せないところがあった。あまりに「健康的に」「生殖としての性」と考えがちで、避妊や中絶、快楽としての性、などに踏み込みにくくなっているようだ。

性教育といった場合、ほとんどが女の子をイメージする人が多く、しかも「弱い性だからまもらなければ」という被害者としての女の子を念頭に置いている。「加害者」になりやすい「男の子」をイメージした人はほとんどいなかった。そろそろその発想はやめて「男の子への性教育」を軸に展開されていっていいのではないかと思う。そうしないと、教える側の男性教師の意識も変わらないのではないか。

余談だが、今回学校を訪れてみて少し驚いたのは、全女性がとっていいと思うがみんなスカート姿であったことだ。子供達を相手に活動的に動くにはズボンが合うのではないかと思うが。

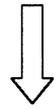
教師は「指導する」という言葉が身についているようで、気に掛かる。特に性教育においては「指導する」より「共に考える」といった姿勢が必要ではないかと思う。自分自身の「解放されていない性意識」と「指導」という言葉がどうもちぐはぐで危うさを感じた。

「生命の尊重」が「母性の尊重」にすり変わっていく危険性も感じる。教科書に流れている基調でもあり、もっと「女性の人権」ということが語られていいのではないか。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



【聞き取り調査側の感想】

この聞き取り調査は4人で行なった。それぞれの人間関係をたどりながら、広島市、廿日市市、三原市、三次市など地域的には広範囲であった。

その中で地域差は認められなかったし、さほど年齢差もなかった。「性教育を受けていない」ということが、学校現場において教育としてなされる場合、同じ出発点だということのようだ。しかし、そうは言っても微妙なところの違いはあり、ある一人の調査者は50代以上の教師に5人ほど断られたと報告している。

以下は、調査者の感想である。

大規模な学校では、教職員の意志統一が難しく、個人的な頑張りで作る以外なかったようだ。むしろ小規模校の方が、だれか一人積極的な人がいれば学校全体に普及しやすいという事実がある。

女性の方が真剣に取り組んでいるようだ。特に30～40代。性差別の視点を押さえているのも女性。男性はそこが弱い。例えば、「マスコミの悪」はほとんどの男性があげているが、具体的にどこが問題なのかと突っ込むと、言葉にできない人が多い。男性は頭では理解しているが、体がついていっていないということだろう。自分の問題としてとらえていないと言えようか。

男性の中には、「科学性」で十分とする人が多く、人権問題、関係性の問題としてとらえる人が少なかった。科学的といいながら、自分の体はよく知らないままであり、指導者という立場で語りがち。

「校長を通さないと応じられない」という人も結構いた。しかし、忙しい時期にもかかわらずほとんどが快く応じてくださり、性教育への不安と期待を率直に語る人も多かった。

「生命の誕生」に神秘性を持たせようとするのは男性に多い。しかし出産体験を共有した男性は、「性教育」を楽しんでいる様子が見えたり、授業そのものも盛り上がりを見せている。

性の持つ多様性、例えば「虚しさ」とか「なぜタブー視されてきたのか」とか言った部分がなかなか引き出せないところがあった。あまりに「健康的に」「生殖としての性」と考えがちで、避妊や中絶、快楽としての性、などに踏み込みにくくなっているようだ。

性教育といった場合、ほとんどが女の子をイメージする人が多く、しかも「弱い性だからまもらなければ」という被害者としての女の子を念頭に置いている。「加害者」になりやすい「男の子」をイメージした人はほとんどいなかった。そろそろその発想はやめて「男の子への性教育」を軸に展開されていっていいのではないかと思う。そうしないと、教える側の男性教師の意識も変わらないのではないか。

余談だが、今回学校を訪れてみて少し驚いたのは、全女性がとっていいと思うがみんなスカート姿であったことだ。子供達を相手に活動的に動くにはズボンが合うのではないかと思うが。

教師は「指導する」という言葉が身についているようで、気に掛かる。特に性教育においては「指導する」より「共に考える」といった姿勢が必要ではないかと思う。自分自身の「解放されていない性意識」と「指導」という言葉がどうもちぐはぐで危うさを感じた。

「生命の尊重」が「母性の尊重」にすり変わっていく危険性も感じる。教科書に流れている基調でもあり、もっと「女性の人権」ということが語られていいのではないか。